

学び合いの中で、歌唱表現を高め合うことができる子ども

ー 小学6年「和音の美しさを味わって合唱しよう」の実践から ー

1 題材のねらい

互いの歌声を聴き合い、和音の響きの美しさや変化を感じながら、全体の響きのバランスに気を付けて、思いや意図をもって表現することができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

子どもたちは、毎朝の今日の歌に始まり、毎日たくさんの音楽に囲まれて生活している。本題材における事前調査でも、「歌うことが好きですか」という項目ではほぼ全員が「好き」か「やや好き」と答えている。「どんな曲を歌うことが好きですか」という項目では授業で取り上げた曲や童謡、ポップス、アニメソングなど様々なジャンルの曲名を挙げている。しかし「歌うことは得意ですか」という項目では60%の子どもが「苦手」あるいは「やや苦手」と回答している。具体的には、音がつられてしまう、高い声を出しにくい、低い音が出ない、声変わりかもしれない、音程が覚えにくい、伸ばす音が長く続かない、声の大きさのコントロールができない、などの問題点を挙げている。

以上のことから分かるように、子どもたちの生活と音楽は密接に関わっており、音楽にふれ歌うことが心の安らぎにつながっていると見える反面、技能的な面において苦手意識を抱えている子どもが多いと言える。

学校生活の中でも大変意欲的に音楽活動や授業に取り組んでいる。5年生の3学期に行った音楽会では、合唱、合奏ともに積極的に表現を工夫する姿が見られた。6年生になり、「つばさをください」「明日という大空」の二部合唱では、空の青さをイメージしながら歌うことができた。また、旋律の盛り上がり線を線で表してから、さらに、自分の気持ちの高まりを線で表し、自分なりの気持ちをもって、歌を通して表現することができた。そして、歌詞の内容や曲想を生かした表現を工夫し、友だちと歌声を重ねる活動に積極的に取り組むことができた。このような学習の上に、歌声が重なって生み出される様々な響きを感じ取ったり、変化を味わったりする活動を通して、より豊かな歌唱表現を目指し、音そのものの響きを感じ取っていく子どもを育てていきたい。

(2) 本題材の内容と音楽科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本学校園音楽科では、感性を高め、思考・判断し、表現する学習プロセスは、音楽的な感受をもとに、よりよい音楽表現を求めて思考・判断・表現を繰り返すことでより高い段階へと発展していくと考えている。これらは子どもの主体的な聴き取りから始まり、どのように学習課題に出合わせるかが大切であると考えている。

① 音楽を形づくっている要素の焦点化

昨年度から「歌唱」分野での研究を進めている。中等部における「歌唱」分野での思考力・判断力・表現力を「曲種に応じた発声により、歌詞の内容や曲想を味わいながら、声部の役割を生かしたり、美しい表現を工夫したりして、全体の響きに調和させて歌う力」と考え、中等部に当たる6年生では、主に「各声部の歌声や全体の響きを聴き、伴奏を聴いて声を合わせて歌う力」と考えた。本題材では、これまで身に付けてきた歌い方を基礎として、一人一人が、

互いの歌声を聴き合い、和音の響きの美しさや変化を感じながら、全体の響きのバランスに気を付けて、思いや意図をもって、より高い歌唱表現をする姿を目指し展開していく。学習指導要領の内容A表現(1)エ「各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせ歌うこと。」に関連させながら学習を進め、子どもたち自身が、[共通事項]の音の重なりや和声の響き、音楽の縦と横の関係などの音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ることができることに重点を置く。

② 音楽的な感受ができる提示の工夫

本題材では、次の三つの教材を選択した。歌唱教材では部分三部合唱「こげよマイケル」(スピリチュアル、長谷部匡俊編曲)。合唱の響きの美しさや、和音の響きやその移り変わりを感じ取ることが学習できるよう、鑑賞教材として混声四部合唱「コラール」(バッハ作曲「主よ、人の望みの喜びよ」)、児童合唱「野ばら」(ウェルナー作曲)を取り上げる。

「こげよマイケル」は、一度聴いたら覚えてしまいそうな親しみやすい旋律を、斉唱と合唱で交互に歌うことができる楽曲である。各パートとも無理のない声域で歌い合わせることができ、和音の響き(I・IV・V)やその移り変わりを感じ取りやすい。また、主旋律以外のパートは順次進行で動いており音程も覚えやすく、三部合唱の導入として適していると考えられる。

鑑賞教材では、児童合唱による「野ばら」、混声四部合唱による「コラール」と自分たちの演奏する「こげよマイケル」の演奏を聴き比べる。それぞれの和音の響きや和音の厚みを自分たちの演奏や歌声と比較することで、自分たちの演奏には足りないものに気付いていけるようにし、自分たちが歌う際に目指す和音や歌声の美しさのイメージをもたせていく。これらの曲から感じる一人一人のイメージは、それぞれである。子どもたちが教え合いや学び合いの活動の中で、友だちの思いや意図に共感し合うことでさらに思いをふくらませ、表現をより工夫していこうとする姿を目指したい。

③ よりよい音楽表現を求める活動の設定

本学校園音楽科として求める学んだことをいかしている子どもの姿を「子どもが学び合いで感じ取ったり、気付いたりしたことをもとにして、さらにその音楽表現を工夫しようとしたり高めようとしたりしている姿」、言い換えれば、「自分の考えや思い、意図を確かめるために繰り返し試し、よりよい音楽表現を追求している姿」と考え、個→グループ(ペア)→全体→グループ(ペア)→個などの「行きつ戻りつ」の繰り返しを「往還」とよび、重視してきた。本題材でも、個→グループ→全体→グループ→個の繰り返しの活動形態を取り、より自分の思いや意図をもとに、各声部の歌声の重なりや全体の響きを繰り返し試し、表現力を育てることにつながっていききたい。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

和音の美しさを求めて歌唱表現していくためには、和音の美しさを味わったり、様々な楽曲に出合い、その和音の美しさを感じ取ったりしていくことが大切である。そこで、今回は、より美しい響きを求めて歌い方を工夫したり、表現を深めたりするという活動の過程に学び合いの活動を設定する。自分たちなりにふさわしいと思う表現を工夫するために、まず、自分の考えや発見、思いや意図をグループで話し合う。グループでまとめた考えや発見、思いや意図をクラス全体に伝え、共通の思いや意図をもとに表現を工夫し深めていくという、二段階の学び合いを繰り返し行う。子どもたちは、音楽を聴いて感じ取った和音の美しさをより詳しく言葉にすることで、和音の美しさを、根拠をもって知覚することができると考えている。また、このような学び合いの場を設定することで、一人一人が自信をもって歌い、音を重ねることの楽しさや和音の美しさを感じると考える。このことは、歌唱への意欲をより高め、さらに表現

を深めることができると考える。また、グループの編成は、一人一人の声の持ち味を生かしつつ、全体の響きの中で自分の歌声を調和させて和音の美しさを感じ取らせるために、3～4人で構成することとし、グループ編成を子どもたち自身にまかせることで学び合いの活動に意欲的に取り組めると考える。さらに、初めて無伴奏演奏や三部合唱に挑戦していくため、まず、グループで階名唱とソプラノリコーダー演奏をすることで、音程感覚と和声感覚をしっかりと身に付けていく。自信をもって歌えるようになったところで、グループ活動による学び合いの場面、クラス全体での学び合いの場面を設定し、思いをふくらませていきたい。

学び合いの場面では、一人一人が和音の響きの美しさや移り変わりから感じ取ったことや、声部の役割や全体の響きなどから感じたことを言語化していく。個からグループ、グループから学級へと感じ取ったことを伝え合うことで、楽曲に対する思いを共有し、さらに表現を工夫しながら全員で和音の美しさを味わう活動を設定していく。その際には、音の重なりや和声の響き、音楽の縦と横の関係といった音楽を形づくっている要素や要素同士の関わりなどを、音楽的根拠をもって思考・判断できるよう取り組むことにした。また、グループによる歌唱練習において、響き合いを感じ取る部分に限定して焦点化するはたらきかけや、グループの演奏の仕方の違いから、演奏のよさを感じ取らせるというはたらきかけを行うことによって、子どもたちが、音楽から感じ取った和音の美しさ曲への思いを言語化して話し合えるようにしたい。さらに、グループやクラス全体で話し合いと演奏を繰り返すことをはたらきかけていくことで、自分の歌声や役割に対して自信をもち、和音の響きの変化からイメージを広げ、音楽表現を高め合えるようにしていく。

3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	美しい和音の移り変わりを感じ取ろう	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「こげよマイケル」のCD演奏を聴き、和音の美しさについて発表する。 ・グループでリコーダーや歌声を合わせて練習したり、録音したりして聴き合いをする。
		2	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで重唱したり、録音を聴いたりしながら、和音について感じたバランスや声の出し方について話し合う。 ・表現を工夫してグループで練習する。 ◇クラスの発表を聴き、友だちの歌声のよさを見付け、さらに表現を工夫していく。
2	美しい和音の響きを味わおう	3	◇「野ばら」「コラール」の演奏を聴き比べ、イメージを広げていく。 <ul style="list-style-type: none"> ・前時の話し合いをいかし、「こげよマイケル」をグループで練習する。 ・グループで演奏し、発表会をする。

4 授業の実際

(1) 美しい和音の移り変わりを感じ取ろう

① 「こげよマイケル」をグループでかっこよく演奏をしてみよう

第1時には、まず「こげよマイケル」の主旋律（以下Aパート）のみを全員で斉唱や交互唱をした後、部分三部合唱の模範演奏を聴き、感じた和音の美しさについて班で話し合い、発表した。

- ・CDは元気よく歌っていて、ハレルヤーの気持ちが強く伝わってきた。とてもきれいにハモっているような感じがした。やってみたいです。(児童A)
- ・前半の同じところはきれいにそろっていて、後半のハレルヤーのところは音が分かれて、パワーアップしている。(児童B)
- ・どうやったら、つられずに音をそろえて歌えるのかを知りたい。(児童C)
- ・Aパートだけなら歌えると思うけど、ハモるのは難しそうです。(児童D)

子どもたちは特に和音の美しさ、力強さに注目していた。斉唱と比べ、部分的にでも音を重ねて歌うと、児童A、児童Bのように豊かな響きに力強さを感じ取ったり、旋律がより美しくなることを感じ取ったりできた。また、自分も歌ってみたいという意欲につながっていった。しかし、児童C、児童Dのように合唱をすることに難しさを感じる子どももいた。

そこで歌声を合わせる活動に取り組む前に、全員で真ん中のパート（以下Bパート）と下のパート（以下Cパート）の階名唱やリコーダー演奏をし、丁寧に音程を確認した。次に、グループでの演奏（重唱）に取り組んだ。音取りが十分できたと思われるグループは録音をして聴き合いをした。以下はその時のふりかえりである。

- ・ハレルヤーの音に自信がなくて小さくなったので、もっと練習したい。(児童A)
- ・リコーダーで吹くと音がハモるのに、歌うとグチャグチャだった。(児童B)
- ・歌い方がバラバラになってしまうので、他の人の音を聴く練習をしたいです。(児童C)
- ・やっぱりBパートを歌っているつもりが、Aパートになっていました。(児童D)

実際に歌ってみると、様々な課題にぶつかる子どもの姿があった。児童Aは、意欲はあるが音程に自信がない。児童Bは、歌声の不安定さに気付いている。児童Cは、客観的に聴けている。友達の歌声が拍に乗って歌えれば、また発音や音色をそろえていけばもっとよくなると考えている。児童Dは、自分は音程が取れていたと思っていたが、いざ歌うと自分のパートではなく、違うパートを歌っていた。音程は取れるが、違う旋律が重なると、その旋律につられ、他のパートへ流れてしまっている。

美しく歌うためには、音程を正しく取る練習の必要性や、互いに聴き合うことをグループで話し合ったり練習したりしていくことが必要であることを見付けることができた。

② 「こげよマイケル」の互いの声の響き合いを大切に演奏しよう

第2時では、「こげよマイケル」を互いの歌声を聴き合い、美しく響き合うことを目指してグループで練習していく。教師からめあてを「美しい和音の響きの歌い方を工夫しよう」と提示した。練習方法は、前時に録音した演奏を全体で聴き、その後、グループで互いの意見を話し合い、また集まり学級全体へ発表した。演奏の聴くポイントとして、音が美しく重なり、まとまった響きになっているかどうかということ挙げた。

- ・ハレルヤーになるとみんな暗い。(児童A)
- ・ハレルヤーのところは、ハが聞こえなくて、レルヤーになっている。(児童B)
- ・自分では結構できたと思ったけど、BパートやCパートが小さすぎて和音に聞こえない。
(児童C)
- ・元気すぎて、みんながAパートになっている。(児童D)

以上のように、自分たちの思っている和音の美しさにならないという感想が多かった。児童

A, 児童Bは発音について児童Cは, 3パートの音量やバランスについて, 児童Dは, 音程やバランスについての改善点に気付くことができた。以上の点を踏まえて, どうしたら和音が美しく響くのか, 音程, バランス, 声の出し方や音を覚えることの3点について, 改善点や注意点を話し合ったり, 実際に歌ってみたりしながら, グループでまとめた。グループで話し合ったことをクラス全体に発表した。

音程

- もっと音程を正確に歌いたいのので, ドレミで歌う練習を増やすとよいと思う。
- A B C全部を覚えて歌えるようにするために, 全員でAパート→Bパート→Cパート→自分のパートの練習をして, 全員の声を聴きながら歌う。

声の出し方

- 遠くまで届くようになめらかに歌うと, A B C全部がとけ合うと思う。
- ハレルーヤのハを目立たせるために, 息を吸う準備をみんなで合わせる。
- ハレルーヤのルーが一番長くのばす音だから, ルーを一番聴き合って歌う。

バランス

- Aパートを目立たすために, 並び方を考える。
- BパートとCパートはAパートより小さく歌うけれど, 遠くにとどくように歌う。

この話し合いを通して, 自分以外のパートの音に気を付けて, 互いの声の響き合いを感じながら歌う方向性が見えてきた。

(2) 美しい和音の響きを味わおう

—形態や曲種の異なる合唱曲を聴き, 和音の響きを比べよう—

第3時では, 児童合唱「野ばら」, 混声四部合唱「コラール」の演奏を聴き, それぞれの和音の響きの違いを見付け, グループで話し合った。

野ばら

- 静かに高くて遠いところでハモっている感じがする。(児童A)
- 透明な感じだけれど強く聞こえる。(児童B)
- 違う音の一つに聞こえるのばし方がちょうどいい。(児童C)
- やさしい感じがして, なめらかにハモっている。(児童D)

コラール

- 男の人の低い声があるから, どっしりとした和音に聞こえる。(児童A)
- 音と音が引き立て合っている。(児童B)
- 声の出だしが, ちゃんとそろっている。(児童C)
- 野ばらに比べて, 人数は少ないのに広がるような広い声で歌っている。(児童D)

「野ばら」では, 児童A, 児童Dは美しく和音が響き合うと優しく聴こえること, 児童B, 児童Cは歌声が重なると一つの心地よい響きになることを感じ取ることができている。「コラール」では, 低音が和音の響きを支えていることや, 各パートの歌い方のよさ, 拍が合うことの大切さ, 音程の正しさ, 強弱などの工夫で, 美しい響き合いになることを感じ取ることができた。そして自分たちの「こげよマイケル」のグループ演奏にいかせる点について話し合い, グループ練習の後, 演奏の発表会を行った。

発表会では, どのグループも一人一人が声に自信をもち, 演奏することができた。特に, 「野ばら」のように, 声の色をそろえ和音を遠くまで響かせようとするグループ, 「コラール」のようにテンポをゆっくりし言葉をはっきり歌うことで一つ一つの和音の響きの違いを丁寧に

表現しようとするグループが目立った。和音を美しく響かせるために、歌い方をそろえようという気持ちを見ることができた。以下は第3時を終えてのふりかえりである。

- ・たった3人で歌ってもきれいな和音ができすぎてしまった。最初はなかなかうまくいなくて無理だと思ったけれど、思い切って他の人に聴いてもらったらいろいろ教えてくれて歌うのが楽しくなってきました。まだ声がフォルテではないと思うのでもっと遠くまで聞こえるよう練習したいです。(児童A)
- ・ハレルーヤーのルーを、野ばらみたいな高い声を出すつもりで歌ったら、今まで一番きれいな和音で歌えました。先生が言われたように、天井が高いところで歌って声を確かめてみたいです。(児童B)
- ・ハレルーヤーに入る前に隣の人を見たら、ハレルーヤーのハがはっきり歌えました。指揮者がいなくても合うんだなと思いました。(児童C)
- ・ハモると楽しいから、もっと長い曲も歌いたいです。(児童D)

5 成果と課題

今回は、歌唱活動を通して、互いの歌声を聴き合い、和音の響きの美しさや変化を感じながら、全体の響きのバランスに気を付けて、思いや意図をもって表現を高め合うことができた。その要因は、①歌い方の表現を工夫する点や楽曲を聴く視点を、音の重なりと和声の響きとすることで音楽の根柢をもって思考・判断できるようにした。②録音をして自分たちの演奏を客観的に聴いたり、様々な和音の楽曲を聴き比べたりすることを通して、自分たちの演奏の課題や改善点（音程・バランス・発音・歌い方）に気付くことができた。また、グループづくりを子どもに任せたことによって、子どもたちが主体的に歌づくりに意欲をもって取り組み、一人一人の声の持ち味を生かすことができた。③学び合いの方法として個→グループ→学級全体→グループ→個の演奏形態、話し合いを繰り返したことで、まとめた考えや発見や楽曲に対する思いを共有し、しっかりとした意図をもって表現を工夫しながら、互いの声の響き合いや和音の美しさを感じ取り表現することができた。以上の3点を挙げるができる。

一人一人の歌声をよりよくするための技能的な課題や、重唱に挑戦したいといったふりかえりの記述もあり意欲の高まりを見ることができたが、45分の授業時間の中で、いかに多くの歌唱による表現の試行錯誤を行うためのはたらきかけを、どのように行っていくかが課題として挙げられる。言葉で表す活動を中心にする、話し合いの時間が多くなり、一人一人が自信をもって歌声を重ね合うまでの練習時間や、全体の響きに調和する歌声づくりの時間、表現をより深くするための試行錯誤していく時間などが短くなってしまふ。学び合う時間をどう位置付けていくかが課題であると考えられる。

また、教材は部分三部合唱であり、ねらいの和音の美しい響きや変化を感じ取るとは、音が



重なることが分かるだけでなく、和音の変化も感じ取るといことなので、子どもたちにとって歌い方を習得していく力も身に付けていかねばならなかったように思う。いろいろな和音の響きの楽曲を聴き比べて、響き合いのよさを感じ取ることから、導入で鑑賞することで自分たちが目指すイメージができるようなよりよい題材構成について考えていく必要がある。

(文責 岡 伸彦)